

「なむ」の識別 確認テスト (古典文法) 解答・解説

■ 解答・解説

問1 ア (係助詞)。「光」という体言に付いており、文末「明かりける」(「けり」の連体形「ける」)を連体形で結ぶ係り結びになっている。

問2 結びの語：ける (助動詞「けり」) / 活用形：連体形。係助詞「なむ」があるため、文末は終止形「けり」ではなく連体形「ける」で結ばれている。

問3 イ (完了「ぬ」の未然形「な」+推量「む」)。直前の「散り」が動詞「散る」の連用形だから。「きっと散ってしまうだろう」の意。

問4 「散り」が動詞「散る」(ラ行四段)の連用形であるため。連用形+「なむ」は完了「ぬ」の未然形+推量「む」となり、「きっと～してしまうだろう」の意になる。

問5 (訳例)「きっと散ってしまうだろう花を、惜しいと思う。」

問6 ウ (ナ変動詞「死ぬ」の未然形語尾「な」+推量「む」)。「死な」はナ変動詞「死ぬ」の未然形で、その語尾「な」に推量「む」が付いた形。「死んでしまうだろう」の意。

問7 「死ぬ」はナ行変格活用(ナ行)の動詞で、未然形は「死な」。「死なむ」はこの未然形語尾「な」に推量の助動詞「む」が付いた形なので、ウ(ナ変動詞語尾+「む」)と判断できる。完了「ぬ」+「む」(連用形接続)ではない点に注意。

問8 イ (完了「ぬ」+推量「む」)。直前の「散り」が連用形だから。「(きっと)散ってしまうだろう」の意。

問9 「なむ」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」+推量の助動詞「む」(終止形)。直前の「散り」が連用形であることから判断する。訳例：「この花は、きっと散ってしまうだろう。」

問10 ア (係助詞)。「花」という体言に付き、文末「見まほしき」(「まほし」の連体形)を連体形で結ぶ係り結び。

問11 連体形。理由：文中に係助詞「なむ」があるため、係り結びの法則により文末の「まほし」が終止形ではなく連体形「まほしき」で結ばれている。

問12 ウ (ナ変動詞「往ぬ(去ぬ)」の未然形語尾「な」+推量「む」)。「往な」はナ変動詞「往ぬ」の未然形。「行ってしまう(とされている)」の意。

問13 (訳例)「宿へ帰って(行って)しまおうとする。」 ※「往(去)ぬ」は「立ち去る・帰る」の意。

問14 エ (願望の終助詞)。直前の「咲か」は四段動詞「咲く」の未然形。願望の終助詞「なむ」は未然形に接続し、他者(庭の桜)への願望「長く咲いてほしい」を表す。連用形「咲き」+なむ(=完了「ぬ」+「む」)ではない点に注意。

問15 「咲か」は四段動詞「咲く」の未然形であり、未然形+「なむ」は願望の終助詞「なむ」(～してほしい)となる。加えて「願はくは…」という他者への願望の文脈とも合致するため、エ(願望の終助詞)と判

断できる。もし連用形「咲き」+なむなら完了「ぬ」+「む」(イ)で「きっと咲くだろう」という推量になり、「願はくは」と意味が合わない。

問16 ア (係助詞)。「鳥」という体言に付き、文末「住みける」(「けり」の連体形「ける」)を連体形で結ぶ係り結び。

問17 連体形。係助詞「なむ」の係り結びにより、「けり」が連体形「ける」となっている。

問18 イ (完了「ぬ」+推量「む」)。直前の「帰り」が四段動詞「帰る」の連用形。「きっと帰ってしまおう」という強い意志・推量。

問19 ウ (ナ変動詞「死ぬ」の未然形語尾「な」+推量「む」)。「死な」はナ変動詞「死ぬ」の未然形。「死んでしまうだろう」の意。

問20 ア (係助詞)。「雲」という体言に付き、文末「たなびきたる」(「たり」の連体形「たる」)を連体形で結ぶ係り結び。

問21 連体形。理由：文中の係助詞「なむ」を受けて、文末の活用語「たり」が連体形「たる」で結ばれる係り結びが成立しているため。

問22 エ (願望の終助詞)。直前の「帰ら」は四段動詞「帰る」の未然形。未然形+「なむ」で、聞き手「君」への願望「早く帰ってほしい」を表す(次の「待ちわびにたり」も願望の文脈を裏づける)。

問23 (訳例)「あなた、早く帰ってほしい。」 ※願望の終助詞なので「～してほしい」と訳す。

問24 傍線部⑨「帰りなむ」…イ (完了「ぬ」+推量「む」)。「帰り」は連用形であり、連用形+なむは完了「ぬ」の未然形+推量「む」。文脈も「早く都へ帰るなむと心せきて」と、話し手自身が「早く帰ってしまおう」と早く意志・推量を表す。一方、傍線部⑩「帰らなむ」…エ (願望の終助詞)。「帰ら」は未然形であり、未然形+なむは願望の終助詞。文脈も「君、はやく帰るなむ。我ら待ちわびにたり」と、聞き手「君」への「早く帰ってほしい」という願望である。直前が連用形(帰り)か未然形(帰ら)かがまず決め手であり、文脈(話し手自身の意志か、他者への願望か)もそれを裏づける。
